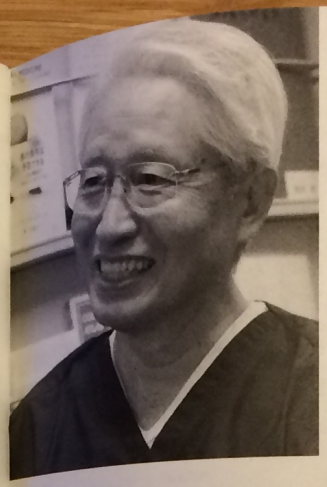

「プロとは夢を叶えるために敢えて困難な道を選択し、
先入観や既成概念を捨てて、情熱を傾け創意工夫をしながら、
ブレずに目的を達成しようと努力し続ける人です」

つのことを必ずやっていただいています。一つは、痛む歯だけではなくすべての歯のレントゲンを撮ること。二つ目は、口腔内写真を様々な角度から十二枚撮ること。三つ目は、唾液検査です。唾液には虫歯の原因となる酸を中和させる働きがあって、その分泌量や酸を中和する強さを調べていく。

その後、レントゲンの見方を説明しながら、ご自身の歯や歯茎の状態がどうなっているかを丁寧に伝えていくんです。その上で、歯科衛生士によるクリーニングをしたり、口の中の細菌を顕微鏡で見せたり、歯の間を掃除するフロスの使い方を指導しています。

そうやって患者さんの口腔の健康状態を整えた上で実際の治療に入っていくんです。それをするのとしないのとでは、治療の精度が格段に違ってきますから。そして、治療がすべて終わっても、数か月ごとにメンテナンスを受けてもらっています。うちは二十名の歯科衛生士がそれぞれ自分の部屋を持っていて、一人あたり八百名から千名の患者さんを担当して継続的なメンテナンスを行っています。

――患者さんから絶大な信頼を寄せられているのですね。

熊谷　ただ、特に開業して間もない頃は、患者さんにそういうことを言っても受け入れてもらえなかったり、中には罵倒されたりしたこともありました。痛いところをいますぐ治してもらったらいい、忙しくてメンテナンスになんか行っている時間はないと。

初診で見えて以降、ぱったり患者さんが来なくなってしまいましてね。赤字経営になり、自分の貯金を切り崩してスタッフの給料を支払っていました。いま思い出しても、本当にあの時期は苦しかったです。そこで患者さんの要求を呑んだほうが楽だったと思いますけど、それは絶対にしなかった。

――熊谷先生をそこまでして突き動かすものは何ですか。

熊谷　やっぱりそれは歯科医としての責任感、使命感です。収入が減ろうが、患者さんから罵倒されようが、患者さんの口腔の健康を守ることがライセンスを預かっている者の果たすべき責任、使命ですよ。困難な道から逃げず、自分の信念を曲げずに、王道を進んでいくことが大事だと思います。

夢を叶えるために敢えて困難な道を選択し、先入観や既成概念を捨てて、情熱を傾け創意工夫をしながら、ブレずに目的を達成しようと努力し続ける人。それがプロの姿ではないでしょうか。

真の患者利益を求めて学び続けた三十五年

――そもそも熊谷先生が歯科医を志されたきっかけは？

熊谷　歯科医だった父親の影響で私も同じ道に進みました。日大の歯学部を卒業した後、臨床医を数年経験し、一九七一年、二十八歳で横浜の日吉で開業したんです。そこでは患者さんもたくさん来て、非常に繁盛していました。

ところが、酒田で外科医をやっていた私の妻の父親が急にがんで亡くなりましてね。ちょうどこの場所で診療所をやっていました。それで建物を改装して、移転開業することになったんです。それが一九八〇年のことです。

――開業時から現在のスタイルで診療されていたのですか。

熊谷　私自身も当初は予防中心ではなく治療中心の考え方でした。何か衝撃的な邂逅があって変わったのかと言うと、そうではありません。自分が信じてやったことが本当に正しいのか、患者さんの利益になっているのか、それを追求するべく、過去の学びを捨て新しいものを取り入れるということを繰り返してきた結果、いまのような形になったということです。

ですから、海外の歯科医療界の錚々たる人たちにもたくさん会ってきました。アメリカやスウェーデンに何度も研修に行きました。論文を読んで感動した先生をどんどん酒田に呼んできましたし、疑問や質問をぶつけてはそれに対する答えをもらう。そういうことをやり続けてきたんです。

――患者さんに真に役立つ本物の歯科医療を求めて学び続けたと。

熊谷　先ほどもお話ししたように経営状態はもう最悪だったんです

けど、ただ漫然と診察室で待っていても何も始まらない。ですから、自分のやれる範囲でとことんアクティブに動いていきました。

まずメンテナンスをしっかりできる衛生士たちを教育しようと。海外の衛生士の教育者を呼んで直接指導を受けさせました。一九九〇年には、海外の歯科医院と同じように歯科衛生士を専任制、担当制に切り替えたんです。

ちょうどその年、山形県民にとって大変衝撃的な出来事が起こりました。都道府県別の三歳児の虫歯罹患率で山形県が七十八・五％でワースト一位になったんです。最も低い大阪府は四十四・四％、スウェーデンは何と八％です。

私はその資料を持って、県の保健課の先生と話し合いました。何とかしないとしょうがないでしょうと。それで私は酒田市内の幾つかの小学校で校医を務め、検診や授業をとおして予防啓発を行っていったんです。市民フォーラムや企業にも出向いていきました。

その結果、どうなったか。一年生の時に乳歯が虫歯だらけだった子が、六年生では永久歯に虫歯が一本もない。そういう子がたくさん出てくるようになったんですね。

――それはすごいですね。

熊谷　二〇〇四年のデータでは、十二歳児一人あたりの平均虫歯本数が一・五九、酒田市に至っては〇・九一です。だから、いかに教育が大事かということです。

きょうやることはその日のうちに終わらせる

熊谷　ところが、ようやく診療所も軌道に乗り始めてきた矢先に、生死を彷徨う大病を患ってしまったんです。五十歳の時ですから、まだ若くてバリバリ働いていたんですけど、ある時、腸閉塞になりましてね。その手術に失敗して尿管を傷つけ、尿管再生手術にも失敗して、さらに水腎症に罹って腎臓をとらなきゃいけないと。そして肺にがんがありそうだということで、肺と腎臓を片方ずつ一緒に摘出したんです。僅か半年の間に三回大きな手術をしました。

そうしたら、さすがに体力のあった私もMRSA（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）に感染したんです。あの時は本当に死にそうになりました。病院のベッドで寝ていたら、夜中に急に熱が出てきて意識を失ったんです。気がつくと集中治療室でした。その後、襲ってきた病気は多臓器不全です。健康な他の臓器が次々と侵された。もう呼吸するのも苦しいんですよ。そこで、血漿交換を二度にわたってやってもらいました。

――その後、どうされたのですか。

熊谷　もうこの病院にいたらまずいと思って、点滴を外して車椅子に乗って自宅に帰ってきました。四つん這いになっても階段を上がれないほどしんどいんです。で、さすがにお腹が空いてきて、地元のお米で重湯をつくってもらって食べたら、不思議と元気になってきたんですよ。

だから口から食べるってすごく大事だなと、その時思いましたね。それから本当に徐々にですけど、体調がよくなってきて、二年くらい経ってようやく思いどおりに体を動かせるようになったんです。

人間はそれまでずっと健康でもいつどうなるか分からないですよ。生きるか死ぬかはやっぱり神様の思し召しだと思います。だから、やるべき時にやらないと、人生を棒に振ってしまう。私はそういう体験をしたおかげで、時間というのは無駄にしたらダメだ、きょうやることはその日のうちに終わらせる、先延ばしにしないと、常に肝に銘じています。

――心に突き刺さる言葉です。

熊谷　どうせ死ぬなら思い切りやろうと。そういう気持ちで七十三歳のいまも、毎日朝六時前には診療所に来て、ほとんど休みなしで仕事をしています。

気づけば、開業以来、学校や歯科医師会、企業などで行ってきた講演会の数は千五百回くらいになります。また、十年ほど前から、開業医向けのセミナーや若手歯科医向けのセミナーを開催し、育成にも力を注いでいきました。

――まさに熊谷先生は患者さんの生涯、ひいては日本の未来を慮って行動されていると言えますね。

熊谷　疾患のない世の中をつくる。生涯を通じて自分の歯で食べられる人がどこの町に行ってもたくさんいますよと。それはすごく時間のかかることだけど、いまから始めていかないと三十年、四十年先に証明することはできないと思います。そういう現実をつくっていくために、これからも地道に積み上げていくだけだと思っています。